大学における学習及び生活

入学試験を通じて出来るだけ、大学で進歩を示す学生に入学して貰いたいという大学人の願いが現行の試験制度のもとでの入試成績と学内成績との相関や、高校成績と学内成績との相関についての調査研究の多いことに現れているように思われる。調査方法は細かい点で、いろいろと工夫がなされており、それらの結果すべてを一つにまとめることには無理があるが、たとえば一学部内で、ある学科では正の相関があり、別の学科では相関がないといった場合に正の相関があるとする割り切り方でできるだけ学部単位でまとめたものを表に示した。

学内成績については、一般教育科目の成績と専門科目との間に高い正の相関があるとするものが多い。入試成績については、一般的にいって大学での成績とあまり関連がないようである。むしろ高校成績（高校調査書の評点平均等）が大学成績、なかでも一般教育科目の成績との間に、かなりの相関を示すとするものが多い。しかし高校成績も専門科目の成績との間では、次第に相関が低くなるようである。これらの調査研究の結果は、高校でよく勉学などを行った学生が、勉強する習慣とでもいえるようなものを、身につけているならば、大学でも良い成績をあげるであろうというごく常識的な事を示し、高校での学習と大学での学習との間に連続性があるといったことを示したものであろう。高校調査書の「行動及び性格の記録」と大学成績との関連性が強いことが改めて確かめられたとの報告は学業以外の要素の重要性を指摘するものとして注目したい（北海道教育大学）。

推薦入学、一般の学力試験による入学、2次募集（主として定員留保）による入学の場合の学内成績の比較もかなり行われ、一般的には推薦入学者の大学成績は、一般学力試験による入学者より良いことが多く、推薦入学の意義を認めているようである。

留年者、中退者についても、その人数の年度による変化や成績との関連が調べられている。2次募集入学者に中退者が多く、高校成績、入試成績の低いものの方に留年者が多いようである。また共通1次試験制度導入以後留年する者の割合が増大したという調査が二三見られる。

医薬系あるいは教員養成系の学部では、国家試験の合否、教員採用試験の合否と大学成績との関連について調べて、多くは専門科目の成績との相関が高いという常識的な結果をえているが、教員採用試験の合否と、大学成績とのあいだに関連がないという報告があり、注目される（大阪教育大学）。

大学入学後の学生の生活実態、勉学意識等については、教育現場にいるものにとって、もっとも知りたいことの一つであるが、現代学生像の把握と大学教育の課題（第3プロジェクト）の外、旧高商系大学、学部を横につないで、学生生活実態と勉学意識調査が行われている。そ

のほか、個々の大学で同様の調査が行われているが、入学直後の希望期待等が学年進行と共に、どの様に変化し、勉学などの大学生活に影響して行くのか、詳しく知りたいところである。

	一般教育科目成績	専門科目成績
専門科目成績	10 (1)	
高校成績	14 (3)	8 (4)
共通1次成績	2 (6)	(2)
2次学力成績	(3)	(1)
入試総合成績	3 (6)	2 (4)

大学の一般教育科目成績、専門科目成績と大学専門科目成績、高校成績、入試成績等との間に相関が高いまたは相関があるとする報告（学部単位）の数。
（　）は相関がないとする数。